様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520547
研究課題名（和文）グローバル化時代における歴史認識の方法

研究課題名（英文）The Method of the Recognition of History in the Globalized Age

研究代表者
岡本　充弘　（Okamoto Michihiro）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：40113930

研究成果の概要（和文）：
研究課題として設定したグローバル化時代における歴史認識の問題を、これまでの歴史学の重要な要素であったナショナルヒストリー、文字を媒体とした歴史への批判的考察をふまえて検討した。そのさい重視したことは、以下に報告されるように歴史のグローバル化や視覚的な歴史の意味、歴史の個人化という問題である。本研究はこうした問題を考察するにあたってとくに海外の研究者との意見の交換に重点をおき、国際学会での発表につとめ、また研究成果を英文の報告書(Histories and the Past)として刊行した。

研究成果の概要（英文）：
This research took up the topic, the 'Method of the Recognition of History in the Globalized Age', in terms of critical reconsideration of conventional historical studies based on national perspective, which make much of literal sources. In this consideration, the research criticized some aspects of globalized history by pointing out the meaning of history privatized and the importance of visual aspect in the recognition of history. The result of the research was published as the booklet, entitled *Histories and the Past*, collecting the papers read at the international historians meetings where the researcher exchanged opinions with the scholars abroad.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1.200.000	360.000	1.560.000
2008 年度	1.200.000	360.000	1.560.000
2009 年度	500.000	150.000	650.000
年度			
年度			
総　計	2.900.000	870.000	3.770.000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：グローバル化

１．研究開始当初の背景

2005 年の第 20 回国際歴史学会議においても（於ニューサウスウェールズ大学）最も重要なテーマの一つとしてオープニング・セッションで取り上げられたのは、「歴史のグローバリゼーションとその限界」（The Globalization of History and its limits）という問題であった。このように、いわゆるグローバリゼーションとよばれる社会の変化のなかで、歴史（学）をどのようなものとして構築していくかという問題は、この翌年の 2006 年からグローバルヒストリーをテーマとした研究雑誌である *The Journal of Global History* が刊行を開始し、また我が国においてもこうした国際的な関心を呼応した研究がすすめられはじめているように、現在の歴史研究においては基本的なテーマとして設定されるようになった問題である。

しかし、そうした問題を歴史研究者の側から理論的なものとして解明する作業は、日本では一部の萌芽的な試みを除けば、必ずしも充分なものとは言えなかった。おそらくそのことの大きな理由の一つは、越国家的な歴史認識の問題が、たとえば共同教科書の作成論にみられるように、ナショナリティにもとづく歴史認識を意外なほど前提としている(共同化ということは、逆に個別的なナショナリティがその前提となっていることを意味している)ためであった。またしばしば論じられるように、日本の歴史学の研究システムのなかで、歴史理論が明確な学問的地位を保持していないこと（純然たる歴史理論学会や研究雑誌の欠如)、さらには近年における実証研究のいっそうの精緻化にともなって、個別的な研究課題をもつ歴史研究者の多くが、理論的な問題を専門的なものとして追求する余裕を保持しえないことなどに求められるかもしれない。

こうした状況のなかでグローバリゼーションと歴史学・歴史認識の関係をどう考えるのかという問題は、グローバリゼーションのいっそうの進行にともないその必要性がますます認識されるようになったにもかかわらず、一般的な意味でグローバル化された歴史学・歴史認識をナショナルヒストリーに代表される伝統的な歴史の上位に位置させ、それへの移行の必要性を肯定的に論じるというレベルにとどまっていた。そこには、そのようなかたちで歴史が統一的なもの、普遍的なものとなっていくことにある問題点を論じていくという姿勢はきわめて希薄であった。本研究はそうした背景のもとで構想されたものであり、その出発点において問題とされたことは、特定の歴史認識がより普遍的なものとして共有されていくことへの疑問であった。

２．研究の目的

したがって以上のことを前提として本研究の目的として設定されたことは、（１）グローバリゼーションの進行のなかで生じている現在の歴史認識論や方法論の転換に内在する問題を考察していくこと、（２）とりわけその問題を、ナショナリティと近代歴史学との関係という視点からを明らかにしていくこと、（３）こうした問題を考察して得た結論を日本語という言語空間のみでなく、他の言語空間に対しても発信していくということである。

（１）に関しては、脱構築論的な歴史理論の意味を明らかにすることに重点をおいた。脱構築論的な歴史理論は、それが内包する過剰な相対主義、さらには、過去の事実という対象よりもむしろ認識主体の側に過剰な優位性をおいているのではないかということから、これまで歴史研究者の間では批判的に取り扱われてきた。しかし、歴史認識の相対性という問題は、現実の問題として過去認識が日本の社会のなかで、とりわけ若年層のなかではきわめて相対化されているという問題を考えるならば、正確な史料操作にもとづく過去の事実の客観的な再構築という議論が、有効な反論として現在機能しているのかという問題として、歴史研究者は考えていかなければならない問題である。その意味では、グロバリーションの進行にともなう人々の認識の画一化に対する批判として強調されるようになった脱構築論な議論の意味を考察していくことが、本研究にとっての重要な課題とされた。

（２）に関し重視されたことは、しばしばグローバルヒストリーとは二項対立的なものとして措定されてきたナショナルヒストリーが学問的な歴史とどのような関係をもっていたのかということを明らかにすることが、グローバルヒストリーの問題点を明らかにできるのではないかという問題設定である。したがってここで問題として設定されたことは、いわゆる科学的歴史をナショナルヒストリーに対置するという思考ではなく、科学とされてきた歴史学の側が包含していたナショナリティの問題である。たとえば日本の歴史学においては、科学的側面を強調するようになった戦後歴史学を含めて、「日本」という政治的・文化的空間が自明のものとして前提とされてきた。そのほとんどの成果は、「日本語」によって、「日本人」という読者を対象として書かれ、また研究対象としての「日本」、あるいは認識主体の単位としての「日本」という枠組みが基底的なものとして存在しつづけてきた。「日本」というものを基軸として「東洋」や「西洋」が対比された

こと、すなわち比較史的な議論の設定や、科学的立場を標榜した戦後歴史学が、なおその方向として「国民」的な、あるいは「民族」的な歴史学の形成を論じたことなどは、その代表的な事例だろう。こうした傾向は、事実認識の問題ばかりでなく、より一般的な、普遍性をもつものとして論じられるべき、方法論や認識論においても共通していた。というよりも、方法論や認識論においては、「日本の変革のため歴史学」という言葉に端的に代表されるように、むしろ過剰なかたちで存在していた。とうぜんこうした視点に立つ歴史学は、その成果を国際的な場に示していくという問題意識や能力を大きく欠如させていた。そうした伝統的な歴史学が内包していた問題点を明らかにしていくことが、本研究が第二の目的として設定したことである。

ここから研究代表者は、本研究の成果を、「日本」という単位や「日本語」という言語空間にたいしてのみではなく、より広がりをもった空間にたいして表現していくという目的を課題として設定とした。そのことの是非、問題点はおそらく様々なかたちで議論されていくものと思われるが、グローバル化という状況のなかで、自らの議論を広く国際的な場に提示していこうと試みることは、現在の歴史研究者にとって重要な課題だろう。とりわけ、方法論や認識論という普遍的な議論においては、そうした活動によってもたらされる成果は少なくないはずである。そのことが本研究の第三の目的として設定されたことである。

３．研究の方法

以上の研究目的にしたがって、本研究では、ポストモダニズム的な歴史理論の今日的な意味、ナショナルヒストリーと歴史のグローバリゼーションとの関連、歴史が専門化されることの意味、あるいは逆にしばしば日常的なものとして存在しているパブリックヒストリーと学問的に専門化された歴史学との関連、といったものの解明が目指された。そのさい研究方法として重視されたことは、海外の研究者との積極的な交流である。

このために研究代表者は当研究費、ならびに本務校である東洋大学よりの一般研究費をもちいて海外での歴史研究者を中心とする研究集会に積極的に参加するとともに、研究代表者が同じく研究代表をつとめる東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化とその問題点」と連携するかたちで、海外の研究者を招聘し、他の研究機関と協力するかたちで、課題の解明につとめた。

またそのさい、研究代表者がとくに方法的に重点を置いたことは、ヴィジュアルなかたちで示されている歴史の意味と、相対性を重視する形で歴史を論ずることの意味である。そうした観点にたって研究代表者はアメリカ歴史学会大会、12 回「文化と権力」研究会議、歴史記述の歴史研究集会、さらには国際歴史学・歴史叙述理論学会（ICHTH）などが主催する会議に参加するとともに、ロバート・ローゼンストーンやヘイドン・ホワイトなどの代表的な歴史の脱構築論者の考えをどのようなかたちで受け入れるのかという問題に取り組み、そこで明らかにされた問題を国内外の研究者に対して発信した。

４．研究成果

以上研究代表者が本研究の課題として取り上げたものは、いずれも歴史研究にとって本質的な問題でありながら、これまで比較的看過されてきた問題である。そのそれぞれを、グローバリゼーションの進行という問題と連鎖させるなかで解明し、広く内外の歴史研究者に問題提起することが本研究の課題であった。

こうした課題にしたがって研究代表者は2007年度においては以下の５欄に記されているように、9月にスペインのオヴィエドで開催された第12回「文化と権力」研究集会、11月の上海で開催された「歴史叙述の新しい方向性：地域史とグローバルヒストリー」についての国際会議に参加し、それぞれ「History and Visuals」「History and Nationality」というテーマについての英文での発表を行なった（学会発表③④、図書①、学会報告論文②）。このうち後者については、この会議に参加したヘイドン・ホワイト、ゲオルグ・イガースらこの間の歴史理論の方向を中心的に論じてきた論者の議論を中心に、会議で行なわれた議論の意義を、長文の報告として公表した（報告書①）。

2008年度においては、前年度に引き続き、9月にカナダのエドモンドンで開催された歴史叙述の歴史をめぐる研究集会、2009年1月にニューヨークで開催された124回アメリカ歴史学会大会などに参加し各国の研究者と意見の交換をおこなうとともに、東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化とその問題点」をとおして歴史と映像の問題を先駆的に論じてきた歴史研究者であるロバート・ローゼンストーンを招聘し、国際日本文化センター、学習院大学の協力を得て、国内の研究者と「ヴィジュアル化された歴史」の意味について意見を交換し、その成果を公表した（雑誌論文②）。

2009年度においては、以上のような研究の成果を踏まえながら、歴史理論にある現在的な問題点を整理要約した論考を『史学雑誌』の「回顧と展望」の場を借りて発表するとともに（雑誌論文①）、ヘイドン・ホワイト、ゲオルグ・イッガース、リチャード・ヴァン、

エドワード・ワン、佐藤正幸らの国際歴史学歴史叙述理論学会のメンバーとともに、国立台湾大学史学科などによって開催された研究集会においてグローバル化という状況の中で、歴史を個人という視点から捉えていくことの意味を論じた（学会発表①②、学会報告論文①）。また会議にともに参加したヘイドン・ホワイトを東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化とその問題点」をとおして招き、東洋大学、立命館大学で上村忠男、小田中直樹などの多くの研究者とともに、セミナーを開催し、そのことを通して現在の歴史学、歴史理論をめぐる問題を議論し、同じ関心をもつ研究者との議論を深めた。なおこの議論の一端は、2010年8月号の『思想』特集号をとおして明らかにされるが、おそらく研究代表者が中心となって進めたこうした成果は、今後の歴史理論をめぐるわが国での議論に少なからぬ役割を果たしていくはずである。これにくわえて研究代表者は2010年1月にはサンディエゴで開催された第125回アメリカ歴史学会大会に参加し、ロバート・ローゼンストーンやアラン・マンスロウなどの代表的な歴史理論研究者との相互に意見に交換し、今後の共同研究についての打ち合わせを行なった。

以上本研究は海外の研究者との交流を前提として課題とした「グローバル化時代における歴史認識の方法」を、主として歴史と画像・映像的なものとの関係、歴史と近代国家との関係、さらには歴史のグローバル化に伴う問題点という面から考察したが、その考察をもとに研究期間に新たに執筆した3本の論文と、今回の研究にともなって改訂した論文1点を合わせた4本の英文論文（総計26,000語）をまとめたものを報告書として作成し、主として海外の研究者に送付し、意見を交換した（報告書①）。

なお最後に本研究の成果として記されてよいことは、研究計画書にもその目標として記されていたように、歴史研究者による最大の国際研究集会である国際歴史学会議での成果の発表（2010年8月、アムステルダム）という問題である。この件に関して研究代表者は本研究の目的にしたがって、本研究の成果をもって大会発表者の募集に応募したが、その結果「歴史にグローバルなアプローチはあるか(Is there a global approach to history)」というラウンドテーブルのディスカッサントとして選出された。おそらくその理由は、ナショナルヒストリーに図式的にグローバルヒストリーを対置し、その優位性を論じる安易な議論に対し、グローバルヒストリーに内在するナショナルヒストリーと同質的な要素を研究者が指摘し、そうした議論を前提として広く歴史が共同化されたものとしてあることの問題点を、多くの歴史研究者に対して提示したということにあると研究代表者は考えている。はたしてそうした問題提起が、歴史や歴史学をめぐる議論のなかでどのような評価を得ていくのかは今後の研究の進展次第ではあるが、少なくとも提起した問題の一端が国際的な場での議論の値するものとしてとりあげられうるものであったということは、本研究の成果に対する第三者的な評価を示すものとしてここに記しておきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

（一） 雑誌論文

①岡本充弘「二〇〇八年の歴史学会―回顧と展望:歴史理論」『史学雑誌』第 118 編/第 5 号、2009 年 5 月、6 頁～10 頁。査読無

②岡本充弘「映し出された過去―ロバート・ローゼンストーンの歴史論」（東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化の問題点」平成 20 年度報告）『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第 11 号、2009 年 3 月 28 日、pp.32-50.査読無

③岡本充弘、書評「成田龍一著『歴史のポジショナリティ』」『歴史学評論』2008 年１月、100～8 頁．査読無

（二）学会発表

① Hayden White, Richard Van, Ewa Domanska, Edward Wang, Masayuki Sato, Michihiro Okamoto, Panel discussion on Transcultural Studies: Language, Figures, and Material Culture, International Conference on Trans-cultural Studies: Language, Figures, and Material Culture、2009 年 10 月 20 日，於国立台湾大学・主催国立台湾大学人文学・社会科学先端研究所(台北).

② Michihiro Okamoto, ‘What to Do with History, Revise or End It? :Towards Everyone being a Historian’, Context-ualizing and Understanding: New Advances from Multidisciplinary and Cross-Cultural Approaches、2009 年 10 月 19 日,於国立台湾大学・主催国立台湾大学人文学・社会科学先端研究所(台北).

③ Michihiro Okamoto, History and Nationality’, International Conference on “New Orientation in Historiography: Regional history and Global History’, 2007 年 11 月 3-5 日、華東師範大学（上海）

④ Michihiro Okamoto, ‘History and Visuals’, The 12th Culture and Power Seminar, 2007.9.26-28, Oviedo University. (Oviedo)

○学会報告論文

①‘What to Do with History, Revise or End It?: Towards Everyone being a Historian’,

Papers for contextualizing and understanding : New Advances from Multidisciplinary and cross-Cultural Approaches‘, pp.165-77.
② Michihiro Okamoto, ‘History and Nationality’, *Papers for international Conference on “New Orientation in Historiography: Regional history and Global History’*, pp.73-82.
（三）図書
①Michihiro Okamoto, History and Visuals: Some reflections on the Transfornmation of the Past for Visual Consumption, in R.V.Miyares & C.R.C Gonzalez eds. *Culture and Power: The Plots of History in Performance*, (Cambridge Scholar Press, 2008.12) pp.103-10.査読有.
○報告書
① Michihiro Okamoto, *Histories and the Past: History in the Borderless Age and Other Essays*, （平成 19 年～21 年科学研究費報告書)、2010 年１月、英文 72 頁 。②
②岡本充弘「歴史学・歴史叙述における新しい方向性－リージョナルヒストリーとグローバルヒストリー」（東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「歴史のトランスナショナル化とその問題点」　平成19年度報告書）、2008年2月、１頁～55頁。

・　以外の著書、論文は０件です。
計
〔雑誌論文〕（計２件）他書評１件

〔学会発表〕（計３件）他パネリスト１件

〔図書〕（計１件）他報告書２件

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者（１）岡本充弘
　研究者番号：40113930
(2)研究分担者（０）
(3)連携研究者（０）